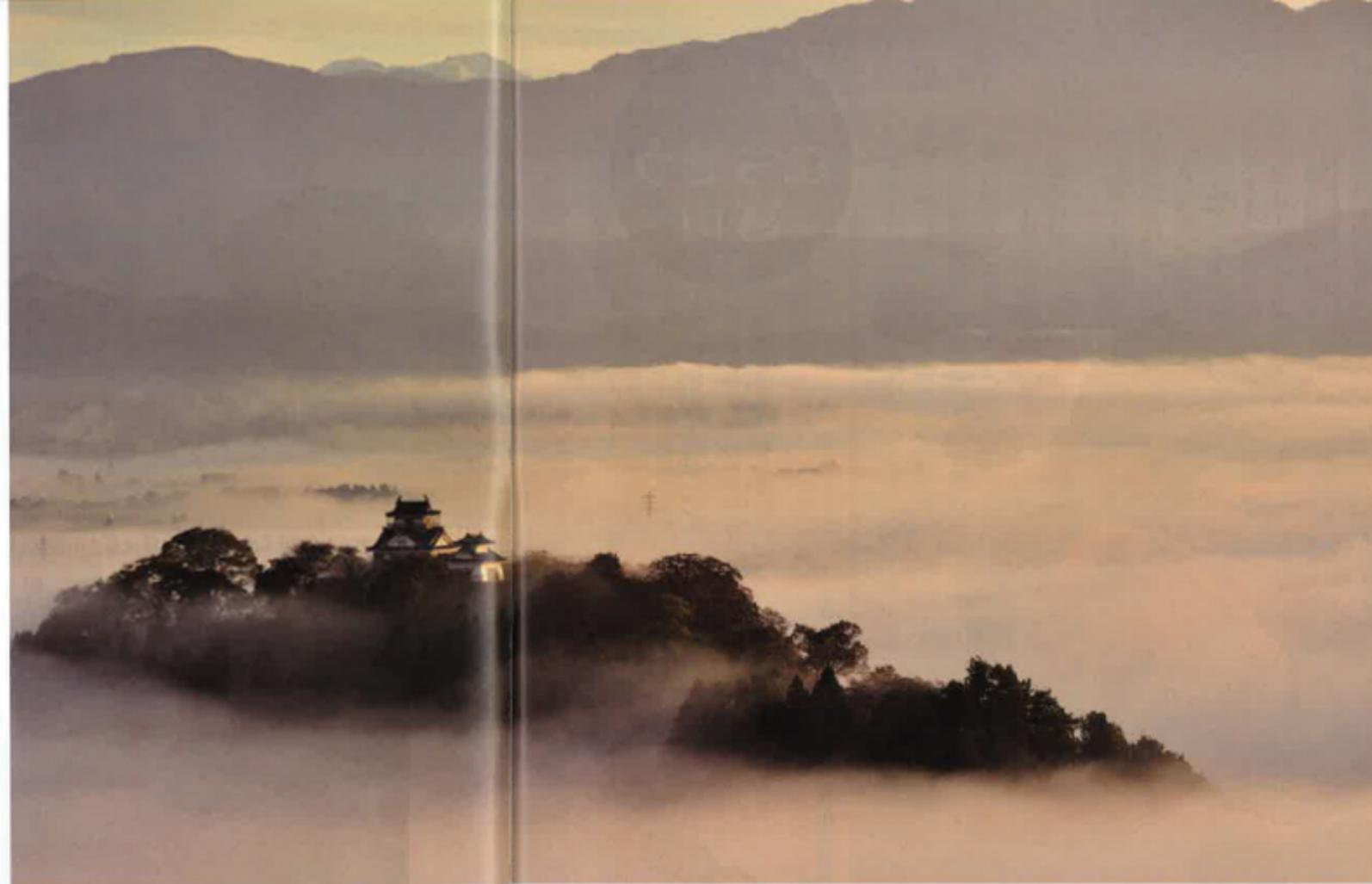


# 越前の城下町・大野市



天空の城 越前大野城。10月から4月末までの明け方から午前9時頃まで、一定の条件で雲海に覆われる



四百年以上の歴史をもつ城下町、越前大野。東西六条、南北六条の碁盤目状の町割りがいまも整然と残っている。「北陸の小京都」にふさわしい風情と雄大な自然に魅れる旅に出かけた。



## まちの特産が並ぶ七間朝市

観光の拠点となる越前おおの結ステーションに車を停め、まだ朝早い街へ向かった。早く着いたのはわけがある。市街地の七間通りに江戸時代から続く名物「七間朝市」が開かれるからだ。七間通りは、かつて越前と美濃を結んだ「美濃街道」にあたり大店が並び大いににぎわった。いまでもその面影を色濃く感じる老舗が残る。大きな看板や格子戸の町並み、二階の窓にはからくり人形がせり出す店もあり、往時を偲ばせる。

味噌蔵や醤油蔵といった昔ながらの店が



地元の野菜などが店先に並ぶ



優美なからくり人形

連なる通りは整備され、広々としている。軒先には野菜や花が並んでいる。時期を迎えた特産の里芋やキノコ、柿をはじめ餅、お菓子など多彩だ。団体の観光客もそぞろ歩いてきた。店のおばさんたちがにっこり微笑んで声をかけてくる。どの顔も人懐っこく、素材でやさしそうだ。

## 小京都の風情を感じる寺町通り

七間通りをしばらく進み、途中、左に折れて細い路地に入ると寺町通りである。大野の町は、織田信長に仕えた武将金森長近公が京都を手本に碁盤の目のようにつくりはじめた。その際、町の東端にお寺を集めて「寺町」とし、そこから西に向かつて五番・四番・三番・二番・本町通りを配置したとされる。以来、寺町は住民の心のよりどころとして水い伝説を育み、城下町大野を象徴する町並みとなっている。

## 質素なのに風格漂う武家屋敷

次に向かったのは武家屋敷旧内山家。幕末期に大野藩立て直しに尽力した内山七郎右衛門良休(家老)と弟の隆佐良隆の俵業を偲ぶため、屋敷を解体復元した家屋である。

門をくぐり、母屋に入る。八畳の間が二間続きにある。左奥には囲炉裏のある台所。青みがかった土壁。どの間も質素であるが風格が漂い、風がわたって清々しい。母屋と渡り廊下でつながれた離れは、大正期に建てられた数寄屋風書院造りで、十六代越前福井藩主松平春嶽の詩幅が掛けられているなど、こちらには洗練された風情が感じられる。庭園が設けられており、澄んだ心地よいときが流れていた。

## あちこちに清らかな水が湧く

大野は「名水の里」ともいわれる。霊峰白山の支脈に囲まれた大野盆地は、真名川・清流川の伏流水に恵まれた清らかな水の町。古くより町の各所に清水が湧き出していて、いまも七間清水、新堀清

るところに名水が湧く。七間清水



おろしそばと醤油カツ丼。名物をセットで



武家屋敷の庭



住民の心のよりどころ

中世から近世にかけて建てられた寺院がいまも整然と並ぶ通りは、市の立つ七間通りに比べ静かで、なんとも情緒にあふれる。白壁の木造建築に囲まれた石畳。通りの脇には水路があり、水のせせらぎが心地いい。落ち着いた清々しさは、まさに小京都ならではの懐かしい日本を感じさせてくれた。

写真提供/大野市